



写真協力：渥美半島観光ビューロー



# 電 照 菊

## 豊川用水 全長98<sup>キ</sup>の贈り物

豊川用水は今年で通水45周年を迎えました



自慢のスプレー菊に囲まれる伊藤さん

愛知県南東部の渥美半島<sup>あつみ</sup>にある田原市<sup>たはら</sup>。夜を美しく彩るイルミネーションは、菊農家のハウスの明かり。闇夜に浮かび上がる「電照菊」の温室群は明け方まで光り輝く。

愛知県は菊の出荷量全国トップ(平成23年)を誇り、なかでも渥美半島は電照菊という栽培方法の発祥地として知られている。

「JA愛知みなみ」の伊藤康弘さんも電照菊で生計を立てる一人だ。奥様と中国からの留学生2名の計4人で栽培に取り組むが、「豊川用水ができる以前は、今のような菊の一大生産地になるなんて考えられなかった」と昔を振り返る。



①収穫作業 ②出荷作業 ③出荷前の菊（水揚げ） ④自動散水システム

## 電照菊とは

電照菊は、日照時間が短くなると花芽を作る菊の性質を利用した栽培方法。夜間も人工的に電気を点けることで花を咲かせないようにして、出荷時期を調整することで、一年中、菊の花を出荷できるというわけだ。

伊藤さんは、スプレー菊という品種を8棟あるハウスで年間3.5回出荷している。

「花の色は白が一番人気があって、主に業務用の仏花の需要が多い」そうだ。

## 菊と水の関わり

「豊川用水による水の安定供給がなければ、菊栽培はとてもやっていけないね。」

もともと渥美半島は、やせた土地と日照りに苦しみ、深刻な水不足に悩んでいた。それが、昭和43年に豊川用水が完成すると、施設園芸をはじめとして全国屈指の農業地帯へと変貌を遂げた。

それだけに、豊川用水への注文も忘れない。

「以前、石綿管の破裂で断水したことがあったけど、あのときは本当に困った。断水すると、市民生活は当然だけど、菊の生育に重大な影響を及ぼすので、断水などが起きないように細心の注意をお願いしたい。」

菊にあげる水の量は、「20年以上やってきても、どれくらいの水をあげるかの見極めは難しい。土壌によって水はけの良し悪しがあるし、去年はあであったから今年はどうしようみたいな、毎年試行錯誤の連続だね」と笑う。

水の量の調整は、長年の経験に裏打ちされた“カンピューター”が頼りのようだ。

## 良質な菊作りのために

良質な菊を作るための取り組みも行っている。

水中の有機物や砂、小石等の不純物を取り除くサンドフィルターを使用することで、自動散水機の水詰まりを防止するとともに水質を改善できる。

また、スプレー菊は一本の茎に数輪の花を咲かせるが、「中央に一輪早く咲く花を摘むことで、すべての花が同一時期に開花し、見栄えが良くなる」という。

ハウスの中だけでなく、ハウスの外にも気を配る。

「ハウス周辺に雑草地があると、害虫が入ってきてしまうので、ハウス内外の除草は気にかけているね。」

かつては慢性的な水不足に苦しんだ渥美半島。年間を通じて安定的に潤いをもたらす豊川用水の開通は、電照菊という大きな贈り物をもたらした。